

2020年 夏休み特別企画（オンライン）

本番当日に未回答だった質問への回答

8月10日（月・祝）13：00～ 吉田館長の歴史授業

質問：「太平洋戦争」ではなく「アジア太平洋戦争」という呼び方をしているとのことですが、「大東亜戦争」では今の時代おかしいでしょうか？

→回答：吉田館長

「大東亜戦争」には、アジア解放のための戦争という政治的なニュアンスが感じられるので、使用には慎重にならざるを得ません。

当時の戦争の呼称をそのまま使うべきだという主張もありますが、すでに定着している日清戦争・日露戦争・第1次世界大戦も当時の呼称ではなく、それぞれの戦争の終了後につけられた呼称です。例えば日清戦争は当時の正式の呼称では「明治27、8年戦役」です。また第1次世界大戦は第2次世界大戦勃発後に作られた呼称です。当時の呼称をそのまま使うべきだということで「大東亜戦争」を使うとすると、すでに定着している日清・日露戦争、第1次世界大戦に関しても呼称を変えなければなりません。

質問：8月6日、9日はニュースで原爆のことが大きく報道されますが、3月10日のことはあまり報道されません。なぜだと思いますか？

→回答：吉田館長

大変重要なご指摘で今後深く掘り下げるべき問題だと思います。

一つだけ指摘できるのは日本人の中に空襲による戦争被害はやむを得ないもの、仕方がないものという考え方が根強く存在するということです。非軍事目標に対する空爆は国際法に違反するという考え方が定着していないと言い換えることもできます。ただ原爆の場合は、被害があまりにも甚大で長期にわたること、道義的にみても反人道性があまりにも明白であること、通常の爆弾と違って人類を破滅に追いやる可能性のある特殊な爆弾が使用されていること、などの理由で日本人の意識の中で通常の空襲とは異なる取り扱いがなされていると考えることができます。

8月15日（土）10：30～ 紙芝居

質問：紙芝居「あおよ、かえってこい」の作者、早乙女勝元さんは終戦をどこで迎えたのでしょうか？

→回答：学芸スタッフ

早乙女さんの自宅は向島区（現・墨田区）寺島町にありました。3月10日の東京大空襲では焼け残りましたが、5月25日の空襲で壁が焼け落ち、その部分を焼けたトタン板でふさいでいました。早乙女さんはその半焼けの家に住みながら、鉄工所で手りゅう弾をつくる作業に動員されていました。ただ、周

りも含めて、戦争に勝ち抜くために作業に励むという雰囲気ではなく、空襲警報による中断もあつたりと、本人いわく「クサクサ」した生活だったそうです。そして8月の敗戦を迎えます。

8月15日(土) 13:00～ 二瓶治代さんのお話

質問：空襲があつたころの食べたもので、一番おいしかったものは何ですか？

→回答：二瓶さん

1943年の年の暮れには、佃煮屋や食べ物を扱っているお店でおせち料理を買いました。おせちを入れるためのお重を佃煮屋などに預けて、帰りに取りに行くとお重に一杯に詰まっていた、それを持って帰るのが楽しみでした。1944年の正月までは食べ物がありました、45年を迎える正月は食べ物がありませんでした。正月の食べ物以外では、りんごが好きでした。

質問：油をくださった方とはその後も交流が続いたのですか？

→回答：二瓶さん

1947(昭和22)年の夏に亀戸に戻ってきた後で、母親が一生懸命探してやっと見つかりました。妹が中学一年生になった時に、元気になった姿を見せに家族でお礼に行きました。助けてくれた方は両国橋を越えた柳橋にある天ぷら屋を営んでいました。

質問：戦中・戦後のなかで、お父さんやお母さんに言われて一番印象に残っている言葉は何ですか？

→回答：二瓶さん

<戦中>

お父さん：銀座に空襲があつた時に、「勝っている、勝っているって世間では言っているけれど、本当に勝っているのかなあ」というようなことを言ったのは印象に残っています。

お母さん：1945年2月、雪の日の空襲の時に、「こんな大雪の日に空襲を受けた人はどうしているかなあ、さぞ大変だろうねえ」というようなことを言ったのは印象に残っています。

<戦後>

お父さん：朝鮮戦争が始まった時に、再び日本が戦争の惨禍に巻き込まれないか心配していた私に、「日本には新しい憲法ができて、世界中に日本は絶対戦争はしないと約束した。戦争に使うための武器や軍隊が一切ないから、戦争はしないよ」というようなことを言っていて、それを聞いて安心しました。

お母さん：「焼き出されたから、仕方ない。負けちゃったから、仕方ない。でも、生きているんだから、がまんしよう」というようなことを頻繁に言っていました。

質問：お兄さんやお父さんには、死に対する恐れのようなものはなかったのですか？

→回答：二瓶さん

兄は、軍国教育を受けていたから、あまり死に対する恐れはなかったと思います。

お父さんにはあったと思います。戦争は負けると思っていたようです。空襲で死ぬかもしれないという恐怖心があって、どうせ死ぬなら家族一緒に死のうと考えていたように思います。

質問：戦争が終わって、9月に学校に登校して、何か変わっていたことはありましたか？

→回答：二瓶さん

長野県の岡谷の小学校に通っていて、薪拾いばかりやっていました。東京との生活のギャップに苦労しました。教科書に墨を塗りました。『家なき子』と『小公女』、『フランダースの犬』、『ジャンバルジャン』を初めて読んでくれた女性の先生がいて、本の面白さを知りました。

質問：長野県からどのようにして東京に戻ってきたのですか？

→回答：二瓶さん

元の家は焼けてしまい、亀戸にはすぐ戻れませんでした。父と兄が働いていた長野の工場の支社として、三鷹に工場があったため、そこで働くために東京に戻って、三鷹で一年暮らしました。汽車で帰ってきました。その後、亀戸に戻りました。亀戸に戻ってきた時は5年生でした。

質問：戦後はバラックなどのもろい建物だったとのことですが、防犯対策などはどのようなことをされていたのでしょうか？

→回答：二瓶さん

特になかったけど、雨戸につっかえ棒をさして、外からドアが開かないように抑えていました。

8月16日(日)13:00～ 大学生と体験者の展示紹介

質問：防空壕のなかはどのような環境でしたか？

→回答：学芸スタッフ

初空襲(1942年)の後、簡素で小型なものでも構わないので、手もとにある資材を工夫して防空壕をつくるのが求められるようになりました。簡素なものでも構わないとされていたのは、防空壕は命を守る「避難所」ではなく、空襲で火災が発生したらすばやく消火活動をおこなうための一時的な「待避所」とされていたからです。

広さは個人宅用(4人用)で畳1枚分ほどとされていて、狭かったことがわかります。防空壕には、ただ土を掘っただけのものもありましたが、資材が手に入った場合は、底の土の上にすのこや板を敷い

たり、板・角材・セメントなどで壁や天井を補強したりしたものもありました。戦時中の資材不足に加えて、政府からの支給などもなく、資材を入手できるかどうかは人や家庭によってばらつきがありました。また、埋め立て地で海拔が低く、家屋も密集している下町地域では、庭が狭く、ある程度掘ると水が出てくるため、水が溜まったり、カビが生えたりしました。そのため、単に畳をあげて床下にもぐるだけのものや、家の外壁にトタン板などで囲いをしただけのものもありました。

戦争末期には、もっと頑丈な防空壕をつくるように指示されましたが、資材不足もあってなかなか整備は進みませんでした。そのなかで本格的な空襲を受けるようになっていきます。

質問：また、長い時ではどのくらい防空壕にいたのでしょうか？

→回答：白石哲三さん（空襲体験者、当時7歳）

空襲の時間によって防空壕の中にいた時間はいろいろでした。空襲警報が発令されてから解除まで、これらはサイレンで知らされました。

→回答：西尾静子さん（空襲体験者、当時6歳）

私の経験では、3月9日の夜では1時間ぐらいでした。その後は壕には入りませんでした。

質問：空襲を受けている時はどういう感覚なのでしょうか？

→回答：二瓶治代さん（空襲体験者、当時8歳）

ただ、恐怖しかありません。早くどっかよそへ飛んで行ってほしいと祈るしかない感じです。空襲警報が解除になると生き延びたことを実感しました。

→回答：白石哲三さん（空襲体験者、当時7歳）

空襲の規模、その時の年齢によってそれぞれ異なると思います。私の場合、3歳年上の姉に手を引かれて迫りくる猛火のなか、まだ燃えていない暗い方を目指して、人びとにまぎってひたすら逃げるのみでした。恐怖心がなかったという嘘になりますが、焼かれないように、逃げるに逃げました。

→回答：西尾静子さん（空襲体験者、当時6歳）

今死ぬのか、今死ぬのかという気持ちでした。

質問：空襲から逃げている時に家族とはぐれてしまった子どもはたくさんいたのでしょうか？

→回答：二瓶治代さん（空襲体験者、当時8歳）

たくさんいたと思います。だから多くの戦災孤児がうまれてしまったのだと思います。

→回答：白石哲三さん（空襲体験者、当時7歳）

たくさんいました。東京大空襲をはじめとして、日本中が廃墟と化した全国で約12万3000人の戦災孤児が生まれました。逃げ惑うなかで親とはぐれ、後日再会できた子もいましたが、両親・家族が空襲

で死亡してしまった子どもたち、それが戦災孤児です。この子どもたちは、戦後、あるいは生涯にわたって、苦しい孤児生活をせざるを得ませんでした。

→回答：西尾静子さん（空襲体験者、当時6歳）

大変多くの子どもがはぐれ、親きょうだいをさがし歩いたようです。

質問：B29は何機使われたのですか？

→回答：学芸スタッフ

3月10日の空襲では、マリアナ諸島の基地から325機が出撃し、そのうち279機があらかじめ決められた目標に焼夷弾を投下しました。この攻撃部隊とは別に、攻撃に先立って4機のB29が房総半島沖の海上で攻撃部隊を無線で誘導しました。また、日本軍の反撃などで損傷したB29が太平洋に不時着する可能性に備え、救助用のB29も4機出動しました（救助任務には潜水艦、水上艦艇、大型飛行艇も使われました）。

質問：東京大空襲で、当時の首相官邸など、政治の中核部分は焼けなかったのですか？

→回答：学芸スタッフ

3月10日の、いわゆる「東京大空襲」では焼けませんでしたが、5月25日の山の手空襲によって、今でいうところの各省庁や首相公邸、皇居の宮殿などに被害が出ました。前日の5月24日の空襲でも、一部の省庁が被害を受けています。

質問：空襲で火傷やけがを負った人たちの治療はどうしたのですか？

→回答：学芸スタッフ

重症患者用の病院などにはありましたが、その約半数が空襲によって焼失しました。そのため、受け入れる病院は不足し、焼け残った医院や学校の一角が臨時の救護所となりました。軍から救護班が派遣されたところもありました。

当時は民間で使える医薬品がそもそも少なかったうえに、空襲によってさらに医薬品が不足し、医師や看護師も不足していました。

空襲で傷ついた人びとが治療をもとめて長い列をつくりましたが、治療といっても傷口や眼を洗うぐらいで、十分な治療を受けることはできませんでした。火傷については、患者さん自身に治療用の油を持ってきてもらわないと治療できないケースもありました。必要な治療を十分に受けられなかったために、戦後も傷あとや後遺症に苦しむ人も少なくありませんでした。

質問：玉音放送を聞いた時はどんな気持ちでしたか？

➡回答：白石哲三さん（空襲体験者、当時7歳）

1945年8月15日の正午、校庭に集合しました。何人か、学校を兵舎として使っていた兵隊さんたちと一緒に。「玉音放送」がはじまりましたが、陛下の言葉はむずかしく、雑音も多くて、何を話したのかさっぱり分かりませんでした。どうやら日本は連合国軍と戦う力がなくなり、「負けた」という話でした。

帰り道、青空を見上げると、1機の戦闘機が低空で爆音をとどろかせ、翼を左右に大きく振りながら旋回しているので、しばらく見上げていました。負けたことが悲しかったのか、うれしかったのか、覚えていませんが…。

➡回答：西尾静子さん（空襲体験者、当時6歳）

私自身は放送を聞いていませんが、その後、解放感をもちました。

質問：体験者の方にとって、戦争が終わったと実感したのはどのような時でしたか？

➡回答：白石哲三さん（空襲体験者、当時7歳）

戦時中は民間の家はもとより、軍の施設も含めて、電灯・ローソクなどの照明を暗くするように決まっていました。夜間の空襲の時、目標にならないようにと強制されていました（灯火管制）。

戦争に負けたその日の夜から、黒い布をはずしたので、家じゅうが明るくなり、それからの毎日は家族みんなが笑顔になり、しばらく食糧不足が続きましたが、楽しい毎日を過ごせるようになりました。

➡回答：西尾静子さん（空襲体験者、当時6歳）

空襲警報を聞かなくなった時と、国民学校が小学校になった時です。

質問：センターの学芸員・研究員の立場から、学校教育や教師にどんなことを求めたいですか？

➡回答：学芸スタッフ

まずは、センターをご利用いただき、教育（者）の立場から東京空襲のことを知り・学んでいただければと思います。センターとしても、そういう機会を設けていきたいと考えています。そこから、学校の授業や教材などで戦争・空襲に関わるものをどのように扱うのか深めていただきたいと思います。

そのなかで、どういう扱い方がいいか、子どもたちがどのような関心や疑問を抱いているのか、それにどう向き合えばいいのか、学校教育の現場ならではの様々な状況や課題が出てくるかと思っています。その際は、遠慮なくセンターにご相談いただき、課題を共有しながら、よりよい受け継ぎ方・伝え方を、ともに考えていきたいと思っています。そういう、学校教育と博物館とがうまく連携・協力できる場としても、センターを活用してみてください。

以上